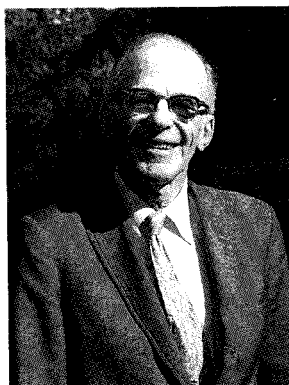


Lyman Spitzer 教授を悼む

私が初めてプリンストンを訪れたのは1980年10月である。先行天体の爆発を引き金とする銀河形成のシナリオを、奇妙にもほぼ同時に、独立に提案した Jerry Ostriker と共同研究を行うためであった。ここに、Martin Schwarzschild と Lyman Spitzer という両大家がおられることは知っていたが、まさかこのような御大と気軽に話ができると思っていた。しかし、驚いたことに、Martin は毎日ランチと一緒に出かけ親切に話を聞いてくれるし、Lyman は湖の側の大きな家へディナーに誘ってくれるしと思わぬ歓待を受け、すっかりプリンストンが気に入ってしまい、その後5年にわたって毎年プリンストンを訪れることになった。(むろん、Jerry をはじめ、Jill Knapp と Jim Gunn 夫妻、Ed Jenkins、Ed Turner、Len Cowie など家族ぐるみでつきあう友人が多くできたこともある。)

その頃、Martin も Lyman も停年で引退されたが、両人は相変わらず毎日ペイトン・ホールに出勤され、昼食会や3時のお茶の時間には地下の溜まり場にやって来られては、若者たちとの対話を楽しんでおられた。一般には、引退した教授にノコノコ大学に来られるのは疎ましいものだが、大きな実績があり、なお研究意欲が旺盛な上に、しっかりした見識の持ち主で、権威を振りかざさず、運営にはいっさい口を出さないという御両人だから、みんな大歓迎の様子だった。私にはとても無理だが、あのように年をとりたいと思ったものである。その御両人が相次いで亡くなられたことに、心がしんと冷える思いがした。

さて、ここでは、教科書や論文ではよく御世話になっているが、日本の研究者とは余り馴染みがない Lyman Spitzer についての個人的な思い出を記しておきたい。幸い彼と共同研究をする機会に恵まれ、彼の人となりの幾分かも知っているのだから、訃報を聞いた今、最後の紹介をしておきたいと考えた次第である。



私は当時北海道大学にいて、銀河形成の他に、羽部朝男、田中裕、富坂幸治(いずれも敬称略)らと星間物質の相変化と銀河進化を結びつける研究も行ってた。プリンストンには Lyman Spitzer という星間物質につい

ての大先生がおられるのだからと、Jerry との仕事の合間に、私たちの論文を進呈し、いろいろなコメントをもらうのを通例にするようになった。論文を渡すと、翌日には、びっしり細かい字でコメントが書かれたノートを前にして、たっぷり2時間はかけて問題点や足りないところを指摘して下さった。実をいうと、彼は小さく崩した字を書く癖があり、その場で解説されないとなかなか判読できなかったのである。そのような付き合いがあったせいも、一様に分布する星間ガス中を伝播する衝撃波が冷たい雲に当たった場合、どのように散乱され、衝撃波のエネルギーはどのように雲に変換されるか、という問題を共同で研究することになった。共同研究といっても、私はこの過程を北大でシミュレーションしただけで、Lyman が散乱振幅を詳しく解析して論文に仕上げたのである。まだ電子メールもなく、ファックスも不便で、かつ私はコンピューターによる作図法を知らなかったのだから、膨大なアウトプットを雪の札幌から小包郵便で何度も送ったことを覚えている。Lyman はその結果を見て、次はどのようなパラメーターで計算すべきかをエアメールで連絡してきた。ほんの14年前なのに悠長にやれたものだと思う。次の夏にプリンストンに行くと論文は仕上がっており、「君の計算が無かったら論文が書けなかったのだから」と言って、私をファースト・オーサーにしまった。そして、高等研究所での火曜日の定例

昼食会で、私の仕事のように紹介して下さったのには頭が下がる思いだった。謙虚な、本当の紳士だと思ったものである。

その年（1984年）、連れ合いの靖子が娘の理英を連れて1年間イエール大学に留学したのだが、Lyman と Doreen 夫妻は、「どうせ家では使わないから」と家財道具をあれこれ持って行くよう気を遣ってくれた。彼らも若い頃イエールで過ごしたので、いっそう懐かしく感じたのかもしれない。昨年4月に2人が京都に来られたとき1日比叡山を案内したが、寡黙な Lyman に対し、何でも興味があって話しかけてくる Doreen の組み合わせは、昔とちっとも変わっていないと感じた。そのとき、かつては登山家で鳴らした Lyman（プリンストンに着任して早々、大学にある教会の塔にロック・クライミングの要領で登って捕まり、「若きプリンストンの教授、塔に登って逮捕さる」と新聞に書かれたのは有名な話だそうだ）の足がひどく弱っているのに気がついたのだが、今回の訃報で「やっぱり」と思った。

Lyman Spitzer が、宇宙望遠鏡計画を提案し、核融合装置に手を付け、コペルニクス衛星の主導者であったことはよく知られているので、今更述べる

までもないと思う。これらに関わる思い出を付け加えておきたい。ハッブル宇宙望遠鏡が打ち上げられ、焦点ボケであることがはっきりした1990年夏、急遽ボルチモアの宇宙望遠鏡科学研究所で対策会議が開かれた。たまたま、そこに居合わせた私は、この会議を傍聴することができた。宇宙飛行士がシャトル内でどのような操作が可能かを説明したり、いったん地上に戻して修理する方法の問題点が議論されたりしたが、そのときの Lyman は実に悲壮で憔悴した表情だった。しかし、「目の黒い（青い？）うちにちゃんと決着を付けたい」という意欲は何えることができた。それと対比的に、昨年お会いしたときの表情は明るく、ハッブル宇宙望遠鏡の成果を携えて日本の初旅行を楽しんでおられた。また核融合について質問したとき、「これほど困難であるとは予想がつかなかった」とのみ答えられて、後は口を濁された。核融合研究の初期、「マッターホルン計画」として軍事機密扱いになったため自由な研究や発表ができないことが不満で手を引かれたと聞いているが、さまざまな経緯があったのだろうと思う。

Lyman Spitzer 教授のご冥福をお祈りしたい。

1997年5月22日

池内 了（阪大・理）

Martin Schwarzschild 教授を悼む

Martin Schwarzschild はその見識、人格、業績において、私が世界で最も尊敬する天文学者であり恩師であった。国立天文台の岡本 功さんから、Lyman Spitzer J. と Martin Schwarzschild というプリンストンの2人の大天文学者があいついで亡くなったことを知らされて暗澹たる思いに陥った。岡本さんのところに Leon Mestel からそれぞれ4月7日と4月20日に電子メールで訃報が来ていたのである。Spitzer 教授については多分どなたかがこの月報に書いて下さると思うので、私は Schwarzschild 教授に対する個人的な思いを主に書いてみたい。



1956年9月、フルブライト交換研究員の一人として氷川丸でシアトルへ行き、そこからアメリカ東部をめざして汽車に乗った。船では寺本英、森 肇、関口 忠、猪瀬 博といったような顔ぶれが友達にな

った。私の行く先はプリンストンであった。これからどういう生活が待ち受けているのか大変心細かったが、萩原先生、畑中先生の推薦を頂いて、